

中世前半の大型鑄鉄鑄物

五十川伸矢

1 はじめに

日本における古代・中世の鑄物資料の考古学研究は、坪井良平氏による梵鐘の研究に代表されるように、青銅鑄物の研究が先行し、それは実に大きな成果をあげてきた⁽¹⁾。しかし鑄鉄鑄物には装飾性が少ないため、青銅鑄物のように美術工芸の分野で取り上げられることはほとんどなかった。また、青銅鑄物が祭器を中心とする器物であるのに対して、鑄鉄鑄物は実用の煮炊具として作られたものが大半をしめ、破損すればすぐに新たな製品の地金として再利用されたため残存する数量も非常に少ない。こうした理由から、その研究は進展しているとはいいがたい。本稿では、中世前半の大型の鑄鉄鑄物を中心にその製作技術や特質についていささか考えてみたいと思う。材料として、口径が1 mに達する大型の鑄鉄鑄物をいくつかとりあげることにする。また、近年梵鐘鑄造遺構の発見があいついで⁽²⁾、これらの大型の鑄鉄鑄物の製作技術が、梵鐘の鑄造技術などとも関連するものと予想されるため、あわせて両者を比較しつつ検討したい。

ここで検討材料とした大型の鑄鉄鑄物は、形態からいえば羽釜や鍋であるが、すべて寺社が所蔵する伝世品である。これらには、それぞれ伝承をもつものもあるが、製作された当初の歴史的背景が忘れ去られたものも多い。紀年や用途、願主、大工などの銘文をもつものに関しては、早くから金石文の研究者によってとりあげられているが、これらの鑄物には、明らかに風呂関係の用具として使用されたものがあり、風俗史的な立場からもとりあげられてきた⁽³⁾。実物に即した考古学研究には、立田三郎氏が箱根神社羽釜を、巽三郎氏が熊野三山に残る羽釜を、それぞれ実測図を示して紹介し検討を加えている。また、小林剛氏は、俊乗坊重源の研究を通じて、鑄鉄鑄物の遺品のいくつかを重源ゆかりの作事にあてた⁽⁶⁾。このほか、江谷寛氏も、湯屋の研究を通じ鑄鉄鑄物を調査して、遺品のいくつかを俊乗坊重源ゆかりの湯釜にあてた⁽⁷⁾。しかし、両氏の指摘には、いささか検討の余地もあり、再考することとしたい。

また、それぞれの大型鑄鉄鑄物には、銘文や伝承による名称があるが、混乱を避けるため、本稿では個々の説明をおこなうにあたって、鏝のあるものを羽釜、鏝のないものを鍋と呼ぶことにする。

2 大型鉄鋳物資料

まず、本稿で取り上げる資料について実測図を示し(図28~30)、その形態や特徴について簡単に紹介する。銘文はすべて陽鋳であり、追刻とみとめられるものはない。図中の外郭線以外の太線は鋳張りを示す。

大和興福寺大湯屋羽釜⁽⁸⁾(1) 興福寺東辺の大湯屋内に安置されている。鏝を完全に失っており、口径175cm、高さ145cm。丸く球形に近い形状をなし、肩部に3本の凸線の装飾がある。胴部以下に、横方向の2筋の鋳張りを明瞭に残している。

相模箱根神社羽釜⁽⁹⁾(2) 芦ノ湖畔の箱根神社の社務所脇に安置されている。底部が抜け落ち、鏝の大半を欠失している。口径120cm、高さ120cm。肩部に3本の凸線の装飾があり、胴部に横方向の2筋の鋳張りを残す。肩部に銘文がめぐり、箱根神社神宮寺の東福寺の湯釜として、文永5(1268)年に作られたことがわかる。重要文化財に指定。

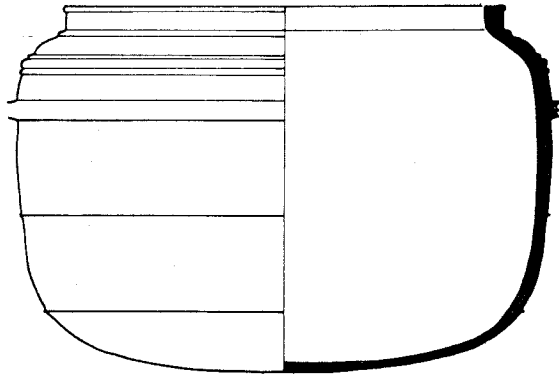
相模箱根神社羽釜⁽¹⁰⁾(3) 箱根神社の社務所脇に安置されているもうひとつの羽釜。口径120cm、高さ115cm、肩部に3本の凸線の装飾があり、鏝の上部に4個の釣環をもつ。胴部に横方向の3筋の鋳張りを残す。文永5年銘の羽釜より器壁は厚い。肩部に銘文があり、同じく東福寺の浴堂釜として、弘安6(1283)年に伊豆国の大工磯部康廣によって作られたことがわかる。重要文化財に指定。

紀伊熊野那智大社羽釜⁽¹¹⁾(4) 熊野那智大社宝物殿の前に安置されている。鏝を欠失しているが、口径105cm、高さ114cm、肩部に3本の凸線があり、胴部に横方向の2筋の鋳張りが残る。やや厚手に作られている。肩部には「願主信範」と銘があるが、大工(鋳物師)は不明である。

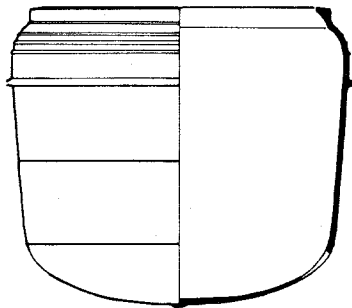
紀伊熊野速玉大社羽釜⁽¹²⁾(5) かつて熊野速玉大社の楼門の脇に安置されていた。現在、大きく大破し、全形を見ることができないが、部分観察と巽氏の報告によって図を作製した。口径105cm、高さ約105cm、表面は錆による劣化がひどいが、肩部には3本の凸線があったようである。胴部には横方向の2筋の鋳張りが残る。『熊野年代記』の新宮の条によれば、元亨2(1322)年の紀年銘のほか寄進者の名があったという。

大和興福寺大湯屋羽釜⁽¹³⁾(6) 興福寺大湯屋内に安置されているもうひとつの羽釜。現在は鏝と鏝部以下を失っている。口径165cm、口縁部と肩部の境目に段があり、鏝から上部は縦方向に6筋の鋳張りが残る。肩部には2本の凸線の装飾があり、段やその境目にも凸線があるが、鋳型の境目で線がずれている箇所がある。

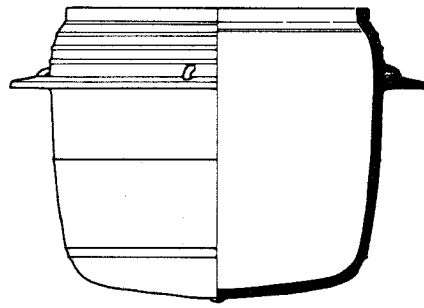
大型鑄鉄鑄物資料



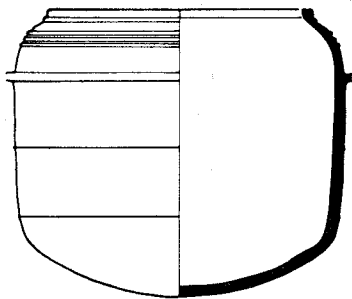
1 大和興福寺大湯屋羽釜



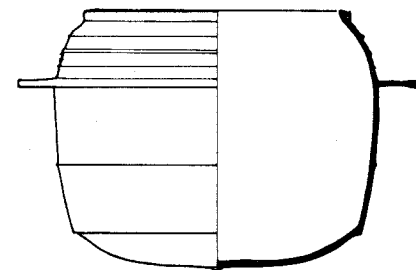
2 相模箱根神社羽釜



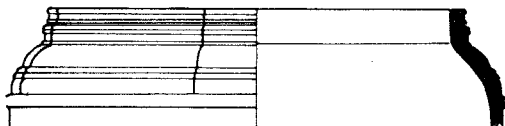
3 相模箱根神社羽釜



4 紀伊熊野那智大社羽釜



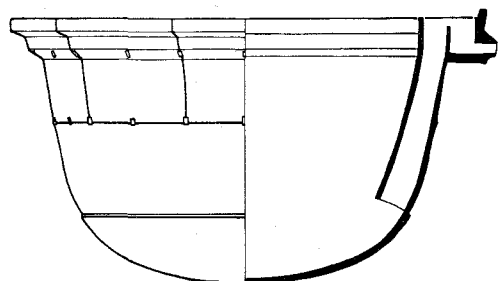
5 紀伊熊野速玉大社羽釜



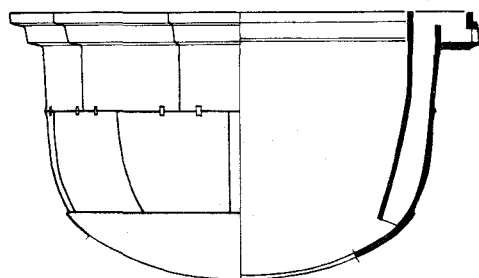
6 大和興福寺大湯屋羽釜



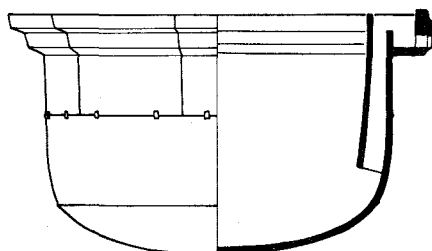
図28 中世前半の大型鑄鉄鑄物(1) 縮尺1/30



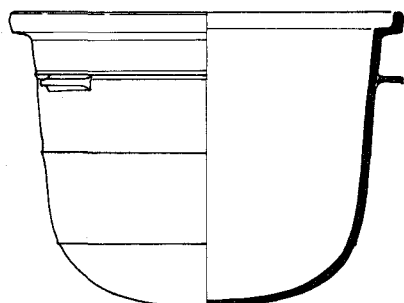
7 周防阿弥陀寺鍋



8 備中新山寺跡鍋



9 近江園城寺鍋



10 出羽黄金堂鍋



図29 中世前半の大型鉄鍋(2) 縮尺1/30

周防阿弥陀寺鍋⁽¹⁴⁾(7) 東大寺別院周防阿弥陀寺の山門に安置。口径185cm, 高さ105cm。口縁部が2段に受け口状になっており, 1箇所特殊な構造をもつ⁽¹⁵⁾。胴部から底部にかけては丸く, 胴部に横方向に2筋の鉄張りがあり, 上1段には, 縦方向に10筋の鉄張りが残る。横方向の上の鉄張りの部分には, 型持が配列されている。重要有形民俗文化財に指定。

備中新山寺跡鍋⁽¹⁶⁾(8) 総社市北方の山中, 新山寺跡の一郭に覆い屋を設けて安置されている。口径185cm, 底部が欠失しているが, 高さ約105cmに復原できる。形状や構造は阿弥陀寺鍋に類似するが, 横方向の鉄張り2筋のほか, 上2段の縦方向の鉄張りが10筋ある。鬼の釜という伝承がある。

近江園城寺鍋⁽¹⁷⁾(9) 天台寺門派総本山園城寺の霊鐘堂に奈良時代の梵鐘とともに安置されている。上の2例に形態や構造が類似する。縦方向の鉄張りは9筋ある。口径165cm, 高さ120cm。弁慶の汁鍋との伝承をもつ。

出羽羽黒山黄金堂鍋⁽¹⁸⁾(10) 羽黒修験の宿坊のある羽黒町黄金堂山門に安置されている。口径155cm, 高さ115cm。横方向の鉄張りが3筋ある。胴部上端5箇所把手があり, 弁慶の粕鍋との伝承がある。

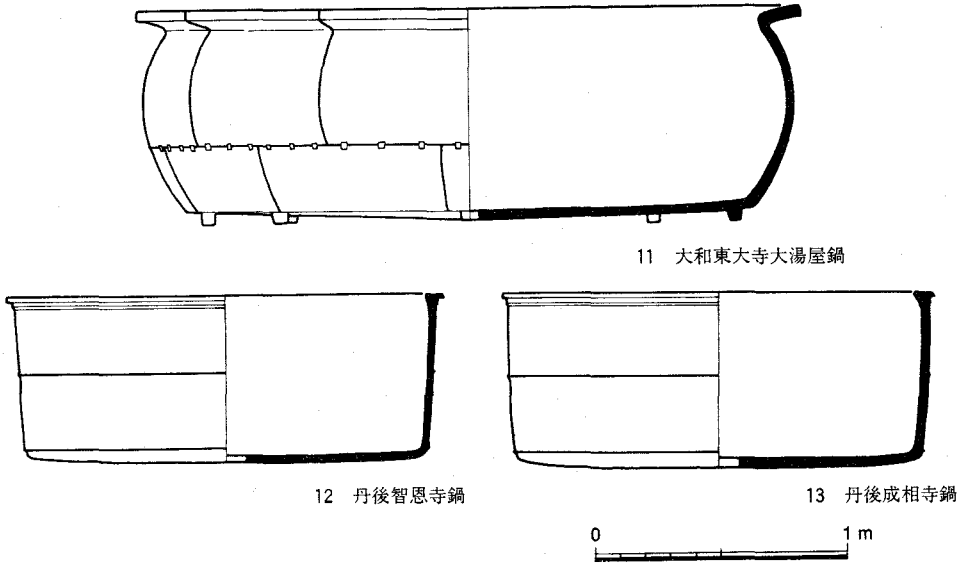


図30 中世前半の大型鑄鉄鑄物(3) 縮尺1/30

大和東大寺大湯屋鍋⁽¹⁹⁾(11) 東大寺大湯屋に安置されている。口径243cm、高さ85cm、口縁が外反し胴部は丸くふくらむ。土師器鍋によく似た形状を示すものがある⁽²⁰⁾。底部は扁平で中央に流水孔とみられる小さな穴がある。底部の端部に6個の小さな脚をもつ。胴部中央に横方向の鑄張りがあり、さらにその上下に11筋の縦方向の鑄張りが残る。鑄上がった当初からのものと思われる荒れた鑄肌を示す。胴部に、建久八年、大和尚南无阿彌陀佛、豊後権守などの銘文があり、「湯船」とよばれるものである。銘文をもつ最古の鑄鉄鑄物であり、重要文化財に指定されている。

丹後智恩寺鍋⁽²¹⁾(12) 名勝天の橋立脇の智恩寺境内に手水鉢として使用されている。口径173cm、高さ64cmのほぼ円筒形を示し、口縁端部は少し横に拡張する。胴部、胴部と底部の境目に各1筋ずつ、横方向の鑄張りがある。底部は扁平で中央に流水孔をもつ。内側面に正応3(1290)年に竹野郡の興法寺の湯船として、山河某が製作した旨の銘文がある。重要文化財に指定。

丹後成相寺鍋⁽²²⁾(13) 天の橋立を眼下にのぞむ成相寺の本堂脇に手水鉢として使用されている。口径169cm、高さ67cmのほぼ円筒形を示し、口縁端部は少し横に拡張する。胴部、胴部と底部の境目に各1筋ずつ、横方向の鑄張りがある。底部は扁平で中央に流水孔をもつ。内側面に正応3(1290)年に竹野郡の等楽寺の温屋のために山河貞清が製作した旨の銘文がある。重要文化財に指定。

3 資料の年代観

以上述べた資料には銘文によって年代を知ることができるものもあるが、紀年銘があっても、古い型式の復古や模作もあるので検討する必要がある⁽²³⁾。

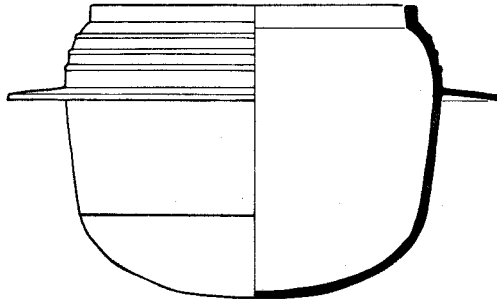
まず、羽釜には紀年銘のもつものが多いのだが、各地の社寺に保存されている紀年銘をもつ羽釜を整理して12世紀から16世紀にわたる形態変化を整理してみた(図31)。これらは一般に「湯釜」と呼ばれるもので、湯立てなどの神事に使用されたものである。

その形態変化は、肩部から口縁が内傾し、胴部から底部にかけて丸い形態を示すものから、次第に肩部が直立し胴部と底部の境目が明瞭になってゆき、やがて胴部が直立し底部は扁平になってゆくものとする。その間、14世紀には口縁部と肩部の間に、段が発生する。この段は口縁部と肩部の間に設けられた装飾の凸線が発達したものと考えられ、さらに多くの凸線でその上を飾ることとなるが、やがて16世紀にはいつて次第に失われていく。興福寺大湯屋羽釜のうち、1は12世紀にさかのぼるものであり、6は口縁部と肩部の境目に段をもうけているが、肩部はかなり内傾するので、14世紀前半ごろのものとする。熊野那智大社羽釜(4)は、その形態から14世紀を降るものではないだろう。また、熊野速玉大社羽釜(5)は、『熊野年代記』によって元亨2(1322)年製作と推定されているが、上記の段がみられず、あるいは13世紀にさかのぼる資料を模倣したものの可能性もある。その他は、それぞれの紀年銘の示す年代を想定してもよいのではないかと思う。

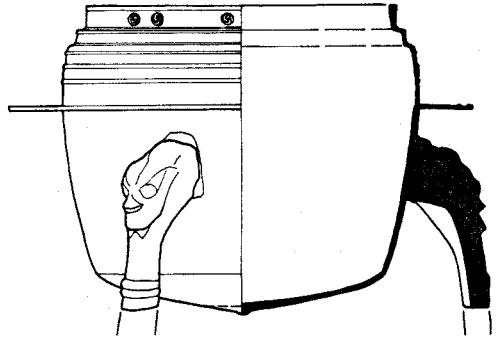
鏝のない鍋形のものには銘文が少なく、このほかにも中世を通じて銘文によって年代のわかるものは僅少である。かろうじて13世紀後葉ごろのものと考えられる大阪府美原町真福寺遺跡出土鋳型から復原しうる鍋の形状は、胴部から底部にかけて、かなりゆるやかに曲線を描くが、底部の中央はかなり扁平となっている⁽²⁴⁾。これを中世前半でも、その中ごろのものとする。鍋の形態も羽釜の型式変化とほぼ同様に、胴部から底部にかけて丸い形態を示すものから、胴部と底部の境目が明瞭になって、やがて胴部が直立し底部は扁平になってゆくものとする。こう考えると、阿弥陀寺、新山寺跡、園城寺の鍋資料はいずれも12世紀にさかのぼりうる形態を示すものであり、黄金堂鍋は胴部がやや直立することから、それよりやや下の年代のものとする。

東大寺大湯屋鍋や丹後成相寺鍋、智恩寺鍋は、底部に穴があいており、後に記すように風呂の浴槽に用いられたものと考えられるため、上記の羽釜や鍋の形をした煮沸用具とは異なった形態をしめすものとして、それぞれの銘文の紀年名の示す年代を想定しておく。

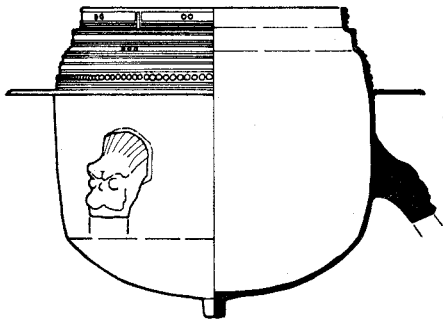
資料の年代観



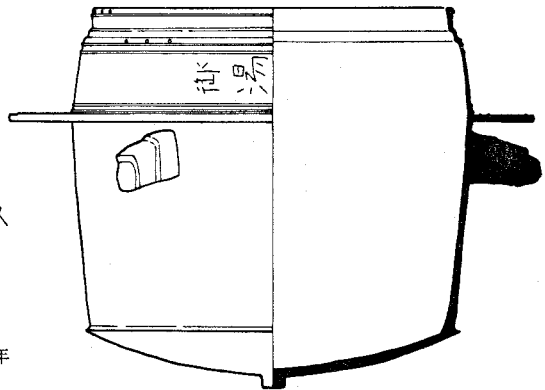
紀伊熊野本宮大社湯釜 建久9年(1198)年



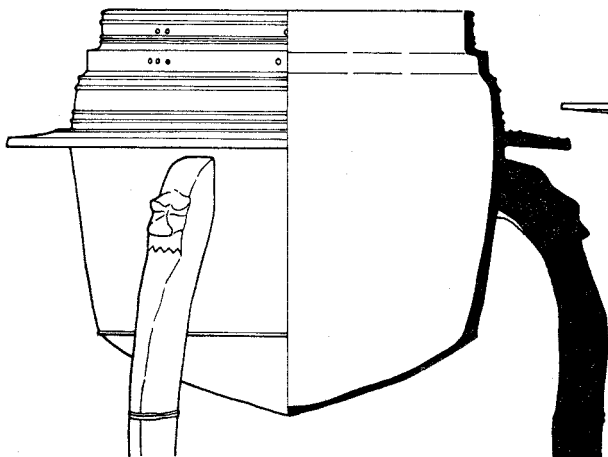
大和朝護孫子寺湯釜 永正13(1516)年



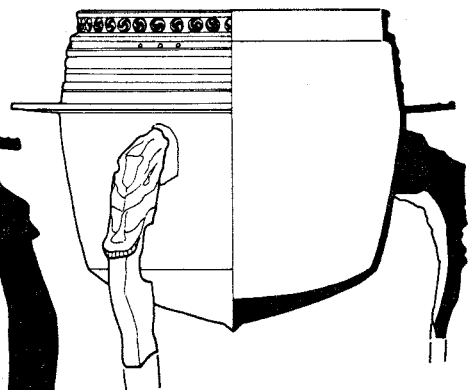
河内流谷八幡神社湯釜 延元5(1340)年



大和生駒神社湯釜 永禄6(1563)年



大和吉水神社湯釜 康暦元(1379)年



紀伊三船神社湯釜 天正16(1588)年

図31 儀式用羽釜の変遷 縮尺 熊野本宮大社湯釜 1/20, 流谷八幡神社湯釜以下 1/10

4 大型鉄鋳物の製作技術

つぎに、こうした大型鉄鋳物の羽釜、鍋の鋳造技術に関して、民俗例や梵鐘鋳造遺構の調査成果も加味して検討を加える。また、やや時代が下がるが、文安4(1447)年に高野山金剛峰寺大湯屋の釜を鋳造した時の記録が高野山文書にあり、作業工程や材料など当時の鋳造技術の一端をかいまみることができるので参考にした。⁽²⁵⁾

内 型 資料の内面は平滑で鋳張りの認められるものはない。しかし、以下に述べるように底部を上にした状態で鋳込みをおこなうものと推定できるため、羽釜の場合、口縁部は鑊部よりすぼまっているので、最初に内型を定盤に設置するのではなく、最下の口縁部を形作る鋳型は外型から設置してゆかなければならず、内型も鑊のあたりで上下にわかれていたものと考えたほうがよい。鋳張りはないが、羽釜の内面のこの部分に、わずかな凹凸が一周するものがあり、上段の内型を設置した時に、その境目に真土を充填して鋳型の合わせ目に鋳張りができないようにしたのであろう。小型品には内面に合印(見切り)とみられる凸線が残るものがある。

外 型 外面には、多くの資料において横方向に一周する幾筋かの鋳張りがあって、いくつか分割した外型を上下に重ねて鋳造したことがわかる。これは日本の梵鐘の場合とほぼ同じやり方である。また、羽釜の場合、鑊の先端の部分に鋳張りを明瞭に残すものもあり、この部分でも上下に鋳型が分割されていたことが確実と思われる。

そのほか、阿弥陀寺鍋(7)、新山寺跡鍋(8)、園城寺鍋(9)や東大寺大湯屋鍋(11)では、横方向の鋳張りのほかに、さらに縦方向の鋳張りが明瞭にみられ、外型がさらに縦方向にも分割されていたことを物語っている。こうした外型の製作にあたっては、かならずしも引型を使用しなくても、各単位部分のもととなる型から外型をおこしたと考えることもできるだろう。こうすれば、大きなドーナツ状の外型を最初から製作するよりも、鋳型作りの作業がかなり容易になるのではないと思われる。

さて、鋳型は砂と粘土で形成されたものであり、内型と外型の隙間にそれより比重の高い溶湯を流し込むのであるから、原理的には外型は浮き上がる力を強く受ける。これを防ぎ、逃げ場を求めたガスによる圧力をおさえるための工夫が必要となる。京都大学教養部構内の梵鐘鋳造遺構では、これに対処して外型を固定するために設置した掛木の痕跡が明瞭に残存していた。⁽²⁶⁾ 大型の鉄鋳物にあっても、こうした掛木に縄を括って掛け、鋳型を緊縛したものと思われる。また、横方向に鋳型を緊縛して固定するためには、外型の外側

を竹籬で締めあげたことが、古い伝統を残すと考えられる民俗例や文献⁽²⁷⁾によって知ることができるが、竹籬をもちいた結桶が普及するまでの時代では、もっぱら縄で縛りあげていたのではないかと考えられる。以上のように、大型の製品で組み合わせる鑄型の数が多く、鑄型の形態が複雑であればあるほど、それだけ強靱な鑄型の緊縛装置の必要があったことが推定できる。

型 持 阿弥陀寺鍋(7)、新山寺跡鍋(8)、園城寺鍋(9)や東大寺大湯屋鍋(11)では、外型の継目すなわち、鑄張りの部分にはほぼ四角形の鉄片が多数埋め込まれている。これは厚さを均等に仕上げるために、はめ込まれた型持と思われる。梵鐘は撞いて音を聞くためのものであるのに対し、上にあげた鑄鉄鑄物は、実用の煮炊具であり梵鐘より器壁を薄く作らなければならない、その点で一段と工夫を要したといえるだろう。

湯 口 青銅製品の場合、湯口によって生じた突起は除去されるのが一般であるが、鑄鉄製品は硬度が高いせいか、そのまま放置したことが多い。『日葡辞書』によれば、放置された湯口は「かまのへそ」と呼ばれていたらしい。さきにあげた資料には、底部が地中に埋没していたり、底の部分が抜け落ちて欠落しているものも多く、底部の形状を確かめうるものは少ないが、箱根神社の文永5年銘の羽釜(2)、熊野速玉大社の羽釜(5)では、底部中央に円錐台状の小さな突起を観察することができる。その他の口縁部、鏝部や胴部に湯口とみとめうるような突起はまず見いだせない。すなわち、使用時と天地逆転した状態で、鑄造がおこなわれていたことが確実である。また、梵鐘鑄造の場合には、龍頭の鑄型の上部に穴がもうけられており、空気抜きの装置として機能していたらしいことがわかっている⁽²⁸⁾。しかし、上にあげた鑄鉄鑄物の資料では底部に、こうした空気抜きとみられるものを確認できなかった。基本的に湯口が空気抜きの穴を兼用していたらしい。

桶 大型鑄物の場合、1基の溶解炉では全部の溶湯を作ることができないため、複数の炉を鑄型の周辺に設置して、溶湯を出湯口に取付けた桶を通して流し込むやり方があり、民俗例をはじめ、『天工開物』の鑄鼎図などからその状況を推定することができる。金剛峰寺大湯屋釜の鑄造に際しては、「鑪^{たたら}八丁」とあるから、8組の溶解炉と桶を鑄型の周囲に配し、桶を通して鑄込みをおこなったものとみてよい。

鑄 造 坑 金剛峰寺大湯屋釜の鑄造の記事には、鑄造を首尾よく終了した後、「釜窟出」との記載があり、鑄造に際して鑄型が穴の中に設置されていたことがわかる。梵鐘の鑄造にあたっては、小型のものを除き、地面に穴を掘って鑄型を設置するのが一般であり、こうした大型の鑄鉄鑄物の鑄造に際しても、これと同じように、地面に穴を掘って鑄型を

中世前半の大型鑄鉄鑄物

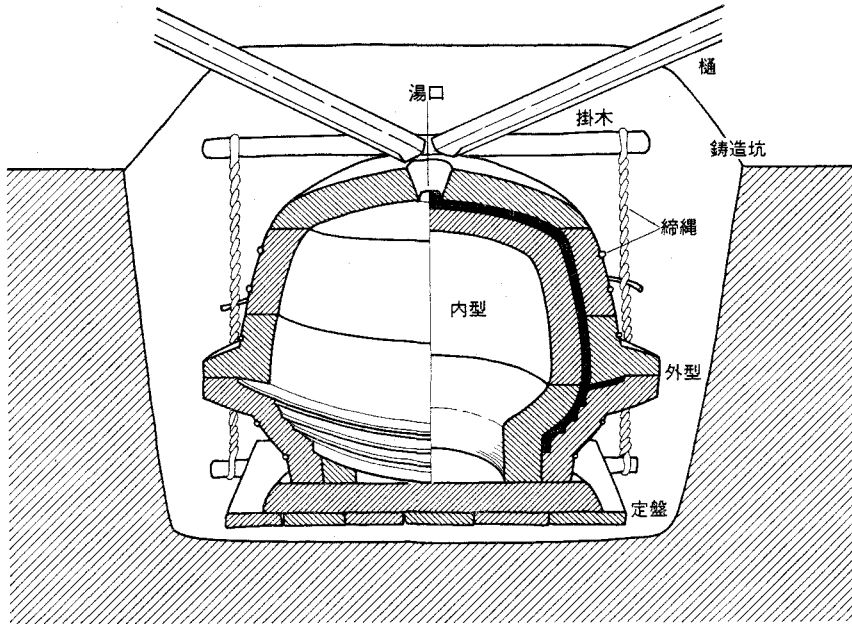


図32 大型鑄鉄鑄物の鑄造模式図

設置し、溶湯を流し込んだと考えたほうがよいだろう。現在、大型の鍋や羽釜を鑄造した土坑については、東大寺西廻廊周辺の調査で1例発見されているが、梵鐘鑄造坑として報告されているものなかには、大型の羽釜や鍋を鑄造したものも含まれているのではなかろうか。⁽²⁹⁾出土鑄型の吟味などを通じて、調査担当各位の御検討を乞う次第である。

以上のような検討をもとに、中世の大型鑄鉄鑄物羽釜の鑄造状況の想定図を作製してみた(図32)。先に述べたように、資料に残された技術的痕跡をはじめ、いくつかの民俗例や文献を参考にしたが、細部についてはさらに検討を要する点が多いと思う。たとえば、鑄型を設置する定盤やその下部構造は、梵鐘鑄造坑として報告されているものからの類推であるし、また、鑄型の設置や鑄上がった製品の取り出しのために組んだ足場の柱もあったのではないと思われる。しかし、全般的な鑄造状況は、こうしたものではなかったかと考える。

上にあげた大型鑄鉄鑄物資料には、表面が錆や腐食によるものではなく、鑄上がった当初からのものと思われる荒れた鑄肌を示すものが多い。それは、ガスが抜けきらなかったり湯回り不良によるものであろうと思われるが、一度に大量の溶湯を流しこまなければならない大型鑄物製作時の困難さを感じさせる。

5 大型鑄鉄鑄物の鑄造技術と鑄物師

以上あげたものについて、製作にあたった鑄物師などの歴史的背景のわかるものについて考えてゆく。まず、小林剛、江谷寛の両氏が俊乗坊重源ゆかりの作事としたものについて検討を加える。

まず、東大寺大湯屋鍋は、その銘文から建久8(1197)年に俊乗坊重源の『南无阿彌陀佛作善集』(以下『作善集』と略す)にしるされ、草部是助によって作られた「湯船」そのものであることが確実である。⁽³⁰⁾この鍋には、底部中央に円形の穴があり、底部周辺に小型の脚がつくられている。これは、そのままの状態置いて使用するためのもので、内容物を流し出す仕掛けをもっているわけであり、風呂の湯を沸かすためのものというより、浴槽として使用されたのではないかと考える。このほか、京都府宮津市智恩寺鍋と成相寺鍋は、ほぼ同大同形で同じ構造をもち、智恩寺鍋には、正応3(1290)年に山河某の作った「湯船」であることが銘記されている。以上のように、当時「湯船」と呼ばれたものは、底部中央に流水孔のついたもので、浴槽として使用されたものと考えられる。

また、小林剛氏は、興福寺大湯屋の羽釜に、かつて「永久五年」と銘が認められたという古老の言から、これを「建久五年」の誤読とし、『作善集』にいう「湯船」として、俊乗坊重源の作事にかかわるものと考えた。⁽³¹⁾小林氏が2口の羽釜のどちらを指されたのかわからないが、もし図28に示した1であれば、たしかに形態からみて12世紀ごろのものと考えてもあやまりはないが、さきに示したように「湯船」は、基本的に浴槽として、底部に排出孔のあるものと考えたほうが妥当であるため、この説にはしがえない。また、以下に述べるように俊乗坊重源に関わる鑄物には、製作にあたって縦方向の鑄型分割の手法がとられているものがあり、この興福寺大湯屋鍋(1)は、こうした手法のみとめられないことも否定的要因となるだろう。また、同じく興福寺大湯屋鍋(6)は、年代がやや下がるものであることは、すでに述べた。

さて、『作善集』には、「湯船」とともに「湯釜」と記されたものが多数あり、湯を煮沸するためのものに違いない。周防阿彌陀寺は俊乗坊重源ゆかりの寺で、草部是助によって作られた重要文化財の鉄塔が現存する。この鉄塔の銘文に「釜一口闊六尺」としるされ、『作善集』にいう「湯釜」が、さきにあげた鍋であることは確実である。⁽³²⁾また、新山寺は備中別所であることが、藤井駿氏の研究によってあきらかにされており、新山寺跡鍋も俊乗坊重源ゆかりの作事と考えてよいものである。⁽³³⁾

次に、園城寺鍋は、上記の阿弥陀寺鍋や新山寺跡鍋に酷似し、江谷寛氏の指摘通りこれもまた俊乗坊重源ゆかりの作事と考えるものである。⁽³⁴⁾『作善集』には園城寺に、こうした「湯釜」を設けた記載がないが、あるいは別寺の「湯釜」がもちこまれた可能性もある。武田勝蔵氏は、寺院の浴堂について述べた項で、正治元(1199)年12月5日早旦、興福寺西金堂の僧兵が、かねて対立の法隆寺に乱入して浴堂の湯釜を奪ったところ、法隆寺側も応戦してこれを取り返したという騒動を紹介している。⁽³⁵⁾湯釜が大切な什物であったために、こうした強奪合戦の目標になったものと思われる。同様の暴力的移動は、梵鐘の場合にもよくあることは、坪井氏が紹介しているとおりでである。⁽³⁶⁾

このほか、江谷氏は俊乗坊重源ゆかりの「湯釜」として、上にあげた阿弥陀寺、新山寺跡、園城寺の鍋のほかに高野山金剛峰寺鍋をあげている。⁽³⁷⁾しかし、藤浪剛一氏が示した図をもとに復原した図を見るかぎり、この鍋は胴部と底部の境目がすどく屈曲し、底部がかなり扁平であり鎌倉時代のものではない。また、縦方向の鋳型分割をおこなっていないため、園城寺例、新山寺跡例、阿弥陀寺例と同列に考えがたく、俊乗坊重源に直接かわるものとするには問題が多い。ただ、口縁部には、上記3例にみられる特殊構造をもつため、あるいは俊乗坊重源ゆかりの実物が破損したため、それが改鋳されたものと考えてはどうだろうか。⁽³⁸⁾

さて、以上のように鍋形のものが「湯釜」とよばれたことが想定できるのであるが、熊野本宮大社の羽釜、箱根神社の文永5年銘羽釜には、あきらかに「湯釜」と銘文があり、こうした羽釜形のものも「釜」と呼ばれていたことも事実である。一方、東国の例であり、いささか時代の下がる資料ではあるが、内耳付き鍋の形態をした千葉県香取大社の天文17(1548)年銘の鍋には「供釜」、⁽³⁹⁾長野県山家神社の慶長7(1604)銘の鍋にも「湯釜」と銘記があり、⁽⁴⁰⁾地域差もあいまって、中世においては全国的に「釜」という煮炊具の名称には、形態に従った統一的なものなかったことも推定され、鏝のあるものを釜、それのないものを鍋と呼ぶのは比較的後になってからのことではなからうか。文献史料を読む際に注意を要するのではないかと思う。

このほか、箱根神社の弘安6年銘羽釜(3)には、伊豆国鋳物師磯部康廣の銘がある。この羽釜は、文永5年銘羽釜にくらべてやや厚ぼったい点など、やや地方的な作風を感じさせるが、あるいは文永5年銘羽釜が破損したために、これを手本に新たに鋳造したのではあるまいか。いずれにせよ、堂々たる作品であり、伊豆国の鋳物師の技術の高さをみる思いがする。

銘文や文献史料から鑄物師を推定しうるものは、以上のようなものである。また、現物は残っていないが、寛元4(1246)年の高野山金剛峰寺大湯屋釜の鑄造にあたっては、惣大工を丹治国高がつとめ、脇大工として丹治国貞・国則以下の10人の鑄物師が多々羅座を担当したことがわかる。⁽⁴¹⁾

このうち、俊乗坊重源に直接かかわるものについては草部是助の作品であることが、ほぼ確実である。この草部是助は、南都大仏を再興した鑄物師であり、笠置寺、東大寺勸進所や現存しないが周防阿弥陀寺の「六葉鐘」を鑄造した有力な鑄物師と推定されており、大仏鑄造にあたっては中国の鑄物師陳和卿とともにあつた人物であることは周知の事実である。一方、山河貞清は、慈光寺鐘、醍醐寺鐘の作者である。また、磯部氏も箱根神社神宮寺の鐘を鑄造しており、丹治国則には太田新次郎氏蔵鐘、菅山寺鐘、長楽寺鐘などの作品がある。

これらの鑄物師には、磯部氏のように地方において有力な活動をおこなったものもふくまれているが、その多くが、中世の前半において梵鐘を中心とする青銅鑄物生産の中核を担っていた人々であることは、坪井氏による梵鐘の研究が明らかにしてきたところである。⁽⁴²⁾ すなわち、大型の鑄鉄鑄物を鑄造した工人たちの多くは、こうした有力鑄物師であつたと考える。それは、前節で述べたように、梵鐘製作における技術内容と大型の鑄鉄鑄物のそれに、多くの共通点を見いだせることから推定しうることである。また、当時の有力鑄物師による鑄物生産が、銅鉄兼業体制のもとにおこなわれていたことも指摘しておきたい。

さきあげた文安4(1447)年の高野山金剛峰寺大湯屋の釜の鑄造にあたっては、大工高野山領山崎の右衛門尉長継と脇大工大和国三輪の衛門次郎があつている。根来寺の御用大工の山崎庄金屋の鑄物師や大和三輪の鑄物師は、中世前半には梵鐘などの作品がみられず、めだつた活動を確認できないが、中世のなかばに至つてこうした大型鑄物の製作にあつたことができるように成長をとげたことを示すものであろう。

このほかには、鑄鉄鑄物として、中世の遺品を確認することができないが、たとえば陸奥塩釜神社の末社御釜社に保存されているような大型の製塩用鉄釜が、製塩のさかんであつた能登や瀬戸内海沿岸などの地域で使用されていたと考えられる。それらの製作には、上にあげたような有力鑄物師があつたのではなく、それぞれの地方の鑄物師がこれを鑄造したのではなからうか。それらは、本稿であげた資料にくらべて底が浅く比較的単純な形態を示すものではなかつたかと推定されるためである。

6 中国の鑄造技術

最後に、東大寺大湯屋の湯船、阿弥陀寺、新山寺跡、園城寺に所在する「湯釜」に典型的にあらわれた特殊な縦方向の外型分割の手法について、若干考えてみることにしたい。

まず、目を転じて中国の鑄造技術に関して、『天工開物』に記された鑄造技術を考える。⁽⁴⁴⁾『天工開物』冶鑄第八卷の釜の条には、内型と外型を土によって精細に作製して鑄造するという記載があり、鑄釜図には、P. Hommel が紹介した民俗例⁽⁴⁵⁾さながらの製造工房の姿が描かれているが、それらは口径2尺程度の小型の釜のようである。また、『天工開物』には、中国の大きな寺では、米2石の粥を煮ることができる「千僧鍋」と呼ばれるものがあるという記載がある。この「千僧鍋」の遺例ではないかと思われるものがある。それは河南省登封県少林寺の大雄宝殿の遺跡に残る鉄鍋⁽⁴⁶⁾である。口径165cm、高さ91cmで、4方に把手があり、推定模式図を図33に示した。この鍋は、明の万暦4(1576)年に製作されたものという。写真を見るかぎり、鑄張りが明瞭にわかり、外型は上下方向に3段、上段と中段の鑄型はそれぞれ8個に分割されていたとみられる。底部や口縁部など細部には違いがあるようであるが、この鉄鍋は、阿弥陀寺、新山寺跡、園城寺の鍋に、形態や鑄型の分割手法が似ている。また、鑄型を縦横に分割する手法に注目すれば、東大寺大湯屋の遺品と基本的に同じ手法をとっている。

同じく、『天工開物』冶鑄第八卷の鐘(鐘)の条には、大型の鉄鐘や釜を作る方法は皆同じであるとの記載があるため、鐘の製法に関する記述をみると、銅鐘は蠟型を原型とする失蠟法を用いること、鉄鐘の場合は、縦方向あるいは横方向に2分した土製の外型に、文様を彫り込む方法をとるとある。地域や時代によって、鑄造の技術に大きな差違があることが確実であり、これをもって中国における梵鐘製作技術の典型とするわけにはゆかない

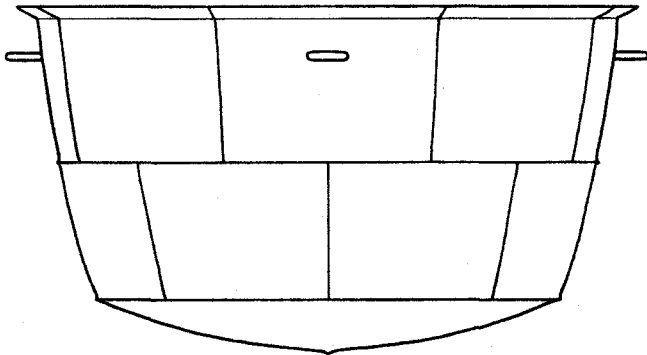


図33 少林寺鉄鍋の模式図

中国の鑄造技術

だろうが、縦方向に鑄型を分割するという、日本の梵鐘にはまったくみられない手法に注目したい。

そこで、坪井良平氏による支那梵鐘年表稿をもとに、中国鐘の鑄型の継目と考えられる鑄張りを観察してみた。ほとんどが写真判定であるため、まったく不十分にはちがいないが、とにかく表5のような結果を得ている。これをみると、中国においては古くから縦方向の鑄型分割手法が存在したことがわかる。また、12世紀以降のものをみると、銅鐘には横方向の鑄張りを残すものや鑄張りのみとめられないものがあり、後者は失蠟法によるのではないかと思う。一方、鉄鐘には、横方向の鑄張りのほかに、縦方向の鑄張りが認められるものが、いくつかみられることに注意したい。これはさきにあげた鍋の鑄型のありかたとまったく同じものである。

また、朝鮮鐘には、横方向の鑄張りと考えうるものを確認できる例があるが、縦方向の鑄張りと確認しうるものはないようである。⁽⁴⁸⁾ そうすると、上にあげた縦方向の鑄型分割の

表5 中国鐘の鑄型分割

年代	所在	口縁形態	材質	鑄型分割
575	奈良国立博物館	平	銅	縦
711	陝西省博物館	波	銅	縦・横
742	済南省山東博物館	平	銅	なし
833	普寧寺（江蘇省丹陽城）	波	銅	横
897	至道観（広東省肇慶府）	平	銅	横
902	長徳寺（岐阜県大垣市）	平	銅	横
1023	法浄寺（浙江省杭州市）	平	？	横
1114	開元寺（広東省湖州）	平	？	横
1184	関帝廟（山東省肥城）	波	鉄	縦・横
1202	乾州鐘閣（陝西省）	波	鉄	縦・横
1204	嵩山少林寺（河南省登封県）	波	鉄	縦・横
1320	玉泉寺（湖北省荊門州）	？	鉄	横
1403	徑山寺（浙江省余杭）	波	？	なし
永楽初年	大鐘寺（河北省北京市）	波	銅	横
1438	発心寺（長崎市鍛冶屋町）	波	銅	縦・横
1460	臨済寺（河北省正定）	波	鉄	縦・横
1525	天寧寺（河北省北京市）	波	銅	なし
1544	北山別院（京都左京区）	波	銅	なし
1561	法性寺（大阪府豊能郡豊能町）	波	銅	なし
1640	萬福禪寺（福建省福清）	平	鉄？	横
1664	大黒寺（大阪府羽曳野市）	平	銅	なし
1700	藤井有隣館	波	銅	縦・横
1875	萬福寺（福建省福清）	平	銅	横
？	長春観（山東省済南）	波	鉄	縦・横
？	五仙観（広東省広州市）	平	鉄	横

手法は、やはり中国を本家とする伝統的な手法ではないかと考えられる。そして、これまでに述べた資料のうち縦方向の鑄型分割手法をとった鑄物を、草部是助の作品と考え、そのほかにこうしたものがあまりないとすれば、これらこそ、俊乗坊重源を通じて、宋の鑄物師陳和卿、陳仏寿以下7人とともに大仏鑄造にあたった過程で中国流の技術を摂取採用して製作したものといわなければならないだろう。

また、こうした大型の鑄物を製作するにあたって、上記の縦方向の鑄型分割手法は、鑄型成形という点においては、引型を用いるよりも容易に形成しうるものの、鑄造の際には強固な緊縛を要するという点も無視されるべきではないであろう。さきあげた興福寺大湯屋羽釜(6)は、草部是助にかかわる作品とくらべて、やや時代の下がるものであって、鏝より上部にこうした縦方向の分割手法をとるものであるが、分割された外型がうまくできておらず、文様のずれや食い違いが生じ、かならずしも上出来とはいえない。製作に当たった工人はこうした縦方向の分割手法に長じていたとは思えず、この時代にはこうした手法が残存するものの、それを伝習することが難しくなっていたのではないかと思われる。

なお、草部是助は、「六葉鐘」と呼ばれる口縁部に切れ込みを入れた中国鐘の形態を模倣したものを作製しているが、縦方向の鑄型分割手法は採用していない。日本の梵鐘にはこうした縦方向の鑄型分割手法による製作とみられるものがなく、たとえ口径が1mを越すようなものにおいてもこうした手法はとられていない。これは、日本の梵鐘が、その祖型を中国の鐘にもとめるものの、その型式や製作技術において独自の発展をとげ、平安時代のおわりごろには、定式化していたためであろう。

本稿作成にあたっては、鑄物の科学技術史研究部会の石野亨先生をはじめ、多くの方々の御教示をたまわり、風呂研究家の佐藤富美房氏には、多くの資料を御垂示いただいた。また、本文中に掲げた実測図は、すべて現物を実見して作製し、諸先学の示された図や写真、解説を参考にして補筆訂正したものを用いた。この一連の作業にあたり、御所蔵の寺社各位には、多大の御協力をいただいた。末筆ながら、各位に謝意を表する次第である。

〔注〕

- 1 坪井良平『慶長末年以前の梵鐘』1939年、『梵鐘と古文化』1947年、『日本の梵鐘』1970年、『日本古鐘銘集成』1972年、『佚亡鐘銘図鑑』1977年、『歴史考古学の研究』1984年
- 2 京都府埋蔵文化財調査研究センター『梵鐘鑄造遺構の現状とその諸問題』1983年
- 3 藤浪剛一『東西沐浴史話』1931年、武田勝蔵『風呂と湯の話』（塙新書6）1967年
- 4 立田三郎「箱根神社の鉄の大釜」『ミュージアム』144号 1963年
- 5 巽三郎「紀州の古銘資料(四) 熊野三山の鉄釜」『熊野路考古』4 1964年
- 6 小林剛『俊乗坊重源の研究』1971年
- 7 江谷寛「湯屋の石風呂と鉄釜」『物質文化』26 1976年
- 8 奈良県文化財保存事務所『重要文化財興福寺大湯屋・国宝同北円堂修理工事報告書』1966年 p.40
- 9 立田三郎 注4論文、箱根神社事務所『箱根神社大系』下巻 1935年 pp.1-2
- 10 注9に同じ。
- 11 巽三郎 注5論文、蔵田蔵ほか『秘寶』第9巻 熊野 1968年 p.221、巽三郎・愛甲昇寛『紀伊國金石文集成』1974年 p.366
- 12 巽三郎 注5論文、巽三郎・愛甲昇寛 注11文献 p.364
- 13 注8に同じ。
- 14 小林剛 注6文献 p.206
- 15 藤浪剛一 注3文献 図28~31、江谷寛 注7論文 pp.66-7 参照。
- 16 永山卯三郎『吉備郡史』1937年 pp.922-3、総社市史編さん委員会『総社市史』美術編 1986年 pp.246-9
- 17 蔵田蔵ほか『園城寺』1971年 pp.292, 313
- 18 佐藤富美房「風呂図鑑 59 羽黒釜」『生活』第52巻12月号 1986年
- 19 国宝建造物東大寺大湯屋・法華堂北門修理工事事務所『国宝建造物東大寺大湯屋・法華堂 北門修理工事報告書』1938年 p.17、図版23
- 20 たとえば、京都大学病院構内A F 15区S X 2・S E 15出土の土師器鍋は、やや底部が丸いがこれに類似した形態をとるものであり、年代も近い。浜崎一志「京都大学病院西構内A F 15区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』1984年 p.35
- 21 京都府文化財保護基金編『京都の美術工芸』与謝・丹後編 1963年 p.115
- 22 同上文献 p.121
- 23 たとえば、奈良県吉野郡吉野町の吉野水分神社蔵湯釜は、銘文から、慶長9(1604)年に豊臣秀頼寄進のものであることがわかる(藤井直正「豊臣秀頼の社寺造営とその遺構」『大手前女子大学論集』第17号 1983年 pp.66-8)。しかし、その器形は南北朝時代を下らないものである。おそらく、製作にあたって古い型式の湯釜を手本にしたのであろう。
- 24 大阪府教育委員会『真福寺遺跡』1986年 p.27
- 25 大日本古文書 家わけ第一 『高野山文書之八』〔又統宝簡集 百九 大湯屋釜目録並勅進帳〕
- 26 五十川伸矢・飛野博文「京都大学教養部構内A P 22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』1984年 pp.16-7
- 27 滋賀県教育委員会『近江の鋳物師』2 1988年 p.86、ジーボルト『江戸参府紀行』(東洋文庫87) 1967年 p.167
- 28 五十川・飛野 注26報告 pp.18-9
- 29 東大寺・奈良県立橿原考古学研究所『東大寺大仏殿西廻廊隣接地の発掘調査』1988年
- 30 筒井英俊編『東大寺現存遺物銘記及文様』(『寧楽』14) 1931年 pp.12-3、小林剛 注6文献 p.206
- 31 小林剛 注6文献 pp.305-6

中世前半の大型鑄鉄鑄物

- 32 小林剛 注6文献 p.206
- 33 藤井駿「俊乘坊重源遺蹟の研究——備中新山寺と備前吉備津常行堂——」『岡山史学』第13号 1963年（『吉備地方史の研究』1971年 pp.393-403 所収）
- 34 江谷寛 注7論文 pp.68-9
- 35 武田勝蔵 注3文献 pp.26-7, このほか『嘉元記』延文2（1357）年12月6日条に、中院と金剛院が合戦をして、取物の大鍋が返出されたという記事がある。
- 36 坪井良平「無情をかこつ鐘の数々」『學鐙』62-8 1965年（『歴史考古学の研究』1984年 pp.232-37 所収）
- 37 江谷寛 注7論文 pp.67-8
- 38 藤浪剛一 注3文献 図28・29
- 39 大場磐雄『官幣大社香取神宮宝物図鑑』1940年 pp.18-9
- 40 信濃史料刊行会『信濃史料』第19巻 1962年 p.181
- 41 高野山文書刊行会『高野山文書』第1巻（復刻版）〔勸学院文書 第七〕
- 42 坪井良平 注1文献
- 43 近藤義郎・渡辺則文「製塩技術とその時代的特質」『日本の考古学』歴史時代 上 1967年 p.57
- 44 藪内清編『天工開物の研究』（『京都大学人文科学研究所研究報告』）1953年, 石野亨『鑄造 技術の源流と歴史』1977年 pp.233-7
- 45 P. Hommel, *China at Work* 1938年 pp.28-33
- 46 翁一・影子『少林寺』1982年
- 47 坪井良平「支那梵鐘年表稿」『歴史考古学の研究』1984年
- 48 坪井良平『朝鮮鐘』1974年